

『フォーラム』によせて

寺崎 昌男

全カりは立教大学に出現した新しい広場である。その機関誌名は『紀要』でなく『フォーラム』とするのがふさわしい。このように願って創刊された本誌だが、学内、学外からいくつかの好意的な反響があったのは歓ばしい。学生諸君の座談会も収められているこの第2号は、本誌の未来につながる新しいステップを予感させる。

創刊号の「授業探訪」の記事には、とくに大きな反響があった。大学審議会答申のようなマクロレベルの政策論的大学論と一般受けする大学批判や大学教授批判論との「間」にある、事実・実践・体験・理論。おそらく今最も求められているのは、これらを主体的に伝えることのできるメディアである。

また、大学の教師、職員自身がどのような眼で勤務校の理念や歴史をとらえ、何を問題とし、日本全体の大学の歴史や現状をどう認識していくか。その眼を養うための共通の知識や情報をどう共有するか。これは外部で出されがちな興味本位の出版物からは受け取ることのできない情報である。

四半世紀前の大学紛争期を別として、大学教職員、特に教員に対する社会的批判が今ほど厳しい時代はない。客観性の少ない立論や売名にも似た著作があることは周知のとおりだが、少なからぬ点で大学が申し開きのできない弱点を抱えていることも、勇気をもって認めなければなるまい。その一つが、教育の質と、それを支える方法の不在、そして基本的には財政条件であることも、異論のないところであろう。だがこれらの弱点を克服することができるのは、制度でもなく、マスコミでもなく、行政でもない。大学の構成者自身である。

立教における知の再生と言語教育の根本的改善をめざす全カリという広場から、本誌を通じて、文字どおり「全学」へのメッセージが発信され続けることを願っている。

(てらさき まさお 全学共通カリキュラム運営センター部長)